2025年

デンマークが成功するとき

When Denmark Succeeds

Esben Grøndal 著

1st Edition

序文

日本で暮らし始めて、もうすぐ10年になる。この間に、たびたびデンマークのことを尋ねられてきた。日本で出会った方々は、私がデンマークについて深く知っていると思ってくれるのだが、実際はそれほどでもない。デンマーク人だから全て知っているわけがないよね。とはいえ、尋ねられてきたおかげで、これまでなら考えもしなかったことに目を向ける機会を得てきた。

質問は実にさまざまだった。デザインのこと、幸福のこと、食のこと。

本当にあらゆる質問が寄せられた。

それらに答えるうち、少しずつ、私の言葉も変化していったように思う。完全な別人に変わったわけではないが、デンマークについて調べる機会が増え、理解が深まり、より丁寧に説明できるようになった気がする。

それでもなお、なぜデンマークという国が「そうあるのか」を語り尽くすには程遠いままだ。

ここ数年、私は「何か形ある物」を作りたいと感じるようになった。ただ話すだけではなく、人に見せたり、手渡したりできるもの。この本は、そうした思いから生ま

れた。一冊の本という形で、会話やプレゼンでは伝えきれない視点を分かち合いたかったのだ。

私はデザインや美学に関心があり、日本ではサービスデザイナーとして働いている。そのため当初は、デンマークのデザインについて、あるいは自分が考える「デザインとは何か」について書こうと思っていた。

けれども、いまの自分は歩みの途中であり、そうした本を書くことに、本当の興味を持てないと気づいた。

だからこの本は、「デザインや仕事そのもの」についての本ではない。これは、私がデンマークの話をする時に、いつも心のどこかで伝えたいと思ってきたことを集めた本だ。

この本は２０２４年と２０２５年、二度にわたるデンマーク滞在のエピソードをもとにしている。最初の旅は、２０２４年の秋に、Campfire（クラウドファンディング）を通して多くの方々の支援によって実現した。

それぞれの理由は異なっても、この企画に共感し、デンマークに関心を寄せてくださったすべての方に、心から感謝している。

この本を開いてくださったあなたに、出会えたことをうれしく思っている。

お礼

この小さな本をCampfireでの支援を通して形にするのを手伝ってくれたみんなに感謝したいと思っている。

特に、次のみなさんと企業には心からありがとうを伝えたい。

- NPO法人フライパン
- HACTAC株式会社
- （株）イミカ

はじめに

２０２５年初頭、アメリカ大統領が「グリーンランドはアメリカの一部になるべきだ」と発言した。

この一言は大きな波紋を呼んだ。というのも、当時グリーンランドはすでに２００年以上（１８１４年以降）にわたってデンマーク王国共同体の一部であったからだ。デンマーク政府は、この問題に慎重に対応しなければならなかった。

グリーンランド側との関係も、そして長年にわたり緊密な同盟関係を築いてきたアメリカとの関係も、どちらも極めて重要だったのだ。小国であるデンマークが単独でアメリカに立ち向かうことはできない。私たちは可能なかぎり多くの友を必要としている。

そのため２０２５年初頭には、北欧諸国やヨーロッパ各国との間で、数多くの会談や訪問が重ねられた。

そうした危機対応の最中に発表された一枚の写真が、私にとても強い印象を残した。



Mette Frederiksenのフェイスブックから引用。

それは、デンマークの首相メッテ・フレデリクセンの私邸で、北欧諸国の首相たちが夕食の席を囲んでいる写真だった。

写真の空気には、どこかすぐに居心地のよさを感じさせるものがある。

低い位置に吊るされた照明、ぎっしりと本の詰まった本棚、テーブルに飾られた生花。いずれも多くのデンマーク人が大切にする家庭の風景だ。

彼らは缶から飲み物を口にし、テーブルの上には、どこの家庭にもあるような水のボトルが置かれている。

私には、この「場の雰囲気」こそが象徴的に思われた。というのも、この集まりが、形式ばった会議室で行われる首脳会談以上の意味を持っていたからだ。

政治の権威を示す装飾を取り払った場所で、彼らは国家の代表としてではなく、人として、友人として、率直に語り合っている。

その写真は、この本の中で何度か立ち返ることになるテーマ「デンマーク的、あるいは北欧的な人間らしさ」をよく映し出しているのだ。

そして、缶ビール（もちろんデンマークのミッケラーのもの）を片手にパンを食べる彼らの姿のなかに、私はデンマークから離れて以来、ずっと恋しく思ってきたものの多くを見た気がした。

それは、日本で暮らす私の視点を形づくってきたデンマーク的なものそのものでもある。

この本を読み終えるころには、あなたにも、あの写真を生み出した価値観に対する、どこか不思議な敬意と郷愁のような感情に共感してもらえると願っている。

目次

パート1 郷里を想う

デンマークについて尋ねられたとき 16
バランスを取るということ 18
とてもデンマークらしい機会 20

パート2 フレゼリシアへ向かう

デンマークの列車に乗り込む 23
人間らしさということ 27
朝食をともにする 31
彼らの仕事を聴く 35
昼食の時間 41
浴水、ランニング、自然 47
プロジェクト「市民と出会う」 51
言葉を真剣に扱うということ 55
エナジーボックス 61

パート3 ある日のコペンハーゲン

サンドイッチがドアの向こうからやってきた 67
ヒエラルキーよりも、つながりを 70
ビールとスモーブロー 73
階段のヒュッゲ 79
家族のためのストリートパーティ 84
レフスヘール島 — Refshaleøen 89

パート4 生まれた町に還る

水に飛び込む 97
Public Beauty — 公的美 101
緑の中にある生活 107
Private Beauty — 家の中の美しさ 111
招かれ、もてなすという文化 116
金曜の夜の映画 119

パート１　郷里を想う

デンマークについて尋ねられたとき

２０１９年のある日、私は京都に本社を置く企業の会議室に座っていた。当時私は、とある日本企業から退職し、デンマーク企業の日本支社を設立して日本でひとりきりの立場にあった。日本支社の代表ではあったが、実際には自分で資料を作り、営業先を見つけるためのネットワークを築く日々だった。

その日の会議は、私にとって大きなチャンスだった。

日本の電子機器メーカーのデザインチームが、私たちのアプローチに興味を持ってくれ、課題を共有し、どのように協働できるかを話し合う場が設けられたのだ。私は緊張していたが、話は順調に進んでいるように感じた。

私は相手の課題を理解するために適切な質問を投げかけながら、その場で考え、私たちのサービスをどう提案できるかを探っていた。

プレゼンテーションでは、本社のあるデンマークの紹介はもちろん、欧州やデンマークの公共機関・産業界での経験についても触れた。そのとき、ひとりの参加者がこう尋ねたのだ。

「デンマークのどこが、そんなに良いのですか？」

その瞬間、私はハッとした。

日本に来て3年が経ち、これまで何度もデンマークの公共サービスやサービスデザインの事例を紹介してきたが、なぜそうした背景が生まれたのかを本格的に説明する機会はほとんどなかったのだ。

私はこれまで、表層的な話で済ませてしまってきた。それで十分通じると思っていた。この時までは。

そもそも私は、多くの背景を「当たり前」として省いていたのだと思う。

聞き手を退屈させたくないという思いもあったが、それ以上に、自分にとってあまりにも当然のことだったため、あえて言葉にする必要性を感じていなかったのだ。

振り返ってみると、私の周囲にいる尊敬できる人は、自分にとっての「当たり前」を言葉にする力があったことに気づいた。

この経験と気づきをきっかけに、私はすぐに、自分の話とデンマークという国の背景の繋がりを資料に盛り込むようにした。

バランスを取るということ

いま、私は自分の会社を経営している。

コロナ禍のあとに現在の会社を立ち上げ、これまでにデザインやデジタルに関するリサーチ、サービスデザインの案件などを手がけてきた。

ひとりで働くのは、簡単なことではない。

孤独に耐えながら事業を続ける人々には、心からの敬意を抱いている。

自分がどんな価値を提供できるのかを定義し、仕事を獲得し、実行し、関係を築き上げる。そのすべてが厳しい学びの連続だった。

私には常に二つの立場がある。

ひとつはプロフェッショナルとしての立場、もうひとつは日本で働くデンマーク人としての立場だ。この二つの間でバランスを取ることは、しばしば難しい課題だった。

デンマークの事例を引き合いに出せば有益な場合もあるが、いつもそうとは限らない。

多くの場合、クライアントは日本企業であって、日本での成功例を求めている。

デンマークから学び、それを日本の文脈に合わせて応用する価値は、必ずしもすぐに理解されるものではない。もちろん、お客さんに理解する責任があるというより、私に伝える責任があると考えている。

そのため、私は常に、自分の視点と専門性をどう結びつけ、意味ある形で提供できるかに心を砕いてきた。

しばらく自分の会社を運営していくうちに、パートタイムやフルタイムのスタッフを雇えるようにもなり、順調に見える時期が続いた。

それでもどこかで、自分がかつてのようにデンマーク的な視点と専門的な視点の間のバランスをうまく取れていないのではないかという違和感が芽生えていたのだ。

デンマークを出てから、私はずっと、親しい友人や旧知の人々とのつながりを大切にしてきた。近況を共有したり、互いの経験を語り合ったりすることを欠かさないようにしている。そうした会話のなかで、私は気づいた。

自分が語っているデンマークは、いつのまにか現実のデンマークではなく、頭の中の物語になっているのではないか、と。

もしかすると、多くの在外者が同じような感覚を持つのかもしれない。

私は統計やランキングを引用し、報告書やケーススタディをもとに「デンマークと

はこういう国だ」と説明していた。けれども、そこに自分自身の実感が乏しいことに気がついたのだ。

なにしろ、長年デンマークで暮らしておらず、年に一度か二度、休暇か出張で帰る程度だったのだから。

私の中のデンマークは、静かに形を変えて現実から離れていったのかもしれない。

とてもデンマークらしい機会

そんな思いが頭から離れずにいたある日、私の進む道を大きく変える一本の電話がかかってきた。

以前デンマークの勤務先で同僚だったR氏からだった。

R氏は私が知る中でも最も聡明で刺激的な人物で、ときどき近況を話し合う仲だったが、そんな彼が仕事を変えたと教えてくれたのだ。

R氏は外部コンサルタントを辞め、いまはデンマーク中央部にある中規模の自治体、フレゼリシア（Fredericia）市のマネージャーとして働いているという。